

---

# バンブーブレード～西からの赤い風～

白炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バンブーブレード〜西からの赤い風〜

### 【Nコード】

N3406D

### 【作者名】

白炎

### 【あらすじ】

すべての始まりは、ある男の金欠から始まった。市立室江高校の剣道部顧問・石田虎侍。彼の前に颯爽と現れた剣客少女、川添珠姫が剣道部に入部して運命は巡り、竹刀を手に集った部員達はやがて幾多の試練を乗り越えて全国大会出場への道を歩んでいく青春剣道物語である！！そして、その剣道部に西からの一陣の赤い風が吹き荒れた時新たな運命が巡る。

## 第0話：赤髪の少年

「めーん!!」

パシーンと乾いた音が木造で建てられた家に響く。いや、そこは家ではなく昔なら珍しくなかった建屋、道場であった。

その道場の中では床に大の字になりながら肩で息をしている子供と、その子供の前に佇む大人の二人がいた。

互いに頭、胴、手に防具を付けており二人の表情は分らない。少しの沈黙の後、荒い息づかいで大の字で寝転がっている子供が声を出した。

「あゝ、やっぱり強いなあ椿さんは」

「なに言ってるの。その歳で私に此処まで食らいついてくる子なんて居ないわよ」

互いに言葉を掛け合いながらその喋り方から大人の方は女性、子供の方は少年だと言うことが解る。

だが、その女性の言葉を聞き少年はどこか拗ねたように反論する。

「ふん！ そんなお世辞はいらんわ、椿さん最後まで本気出してへんかったやん」

防具を付けたまま少年は上半身をゆっくりと持ち上げ片手に持っていた竹刀をその女性、椿に向け指摘した。

椿はそう少年に言われ少し苦笑する。

「ふふ、だってしょうがないじゃない。私が本気出したら勝負にならないじゃないの」

椿が少年に諭すように喋り掛けるが、少年はそれでも納得がいかないのか、ぶくとか、うくと唸っている。

「ほら、そんな所で寝そべってないで、防具を脱ぐ。時間も時間だしね」

椿の言う通り時間は五時を過ぎていて、外は夕暮れであった。

少年は夕暮れになった空を見てフンと鼻を鳴らし防具を脱ぎ始めた。

面を取った少年の顔はまだ先程のことが気に入らないのか拗ねたような顔であったが整った顔立ちであるためどこか可愛らしく見え、その髪も夕日を浴びて美しく赤く輝いている。

否、その少年の髪は実際に赤かった。

その赤い髪をくしゃくしゃと自分で掻き、椿に再び向き直った。

「まあええわ。やけど次は負けへんからな！」

椿に指を差しながら大きな声で宣言する。

少年のその言葉を聞き、椿は微笑しながら

「ええ」と頷いた。

椿は少年から道場の入口に目を向け、入口に小さな影が隠れているのに気がつき優しい声で小さな影を呼んだ。

「タマキ、隠れてないでこっちにいらっしやい」

小さな影、タマキと呼ばれた少女はトコトコとこちらに近づきゆつくりと口を開いた。

「リュウマくんともうあそんでいい？」

タマキはそう椿に聞くと、椿はリュウマと呼ばれた赤髪の少年に「どうする？」と聞き返す。

リュウマは先程の拗ねた態度とは全く違い、顔はパアと華が咲いたように満面の笑みを浮かべた。

「もちろんや！ 行こか、タマキ。今日はブレードブレイバーごっこしよか！」

リュウマの言葉を聞いたタマキもまた、笑みを浮かべ瞳を輝かせながらコクコクと頷いた。

椿はリュウマと共に道場から出て行く我が娘、タマキを見つめながら三度目の微笑を浮かべた。

「仲が良いね、あの二人は」

二人を見つめていた椿の隣から低い男性の声が聞こえ、振り向くとそこには白髪の優しい顔した男性が立っていた。

「あなた…。ええ本当に、リュウマ君に良く懐いて」

「だが、もう少しだったか？ 彼が引越すのは…」

「ええ、大阪に。…タマキは寂しがるでしょうけど」

悲しそうな顔を浮かべる椿を見やり、タマキの父は微笑していた。

「タマキだけかい？ 私から見たら、君も随分リュウマ君に入れ込んでるみたいだが」

椿は夫のその言葉を聞き苦笑しながら頷いていた。

「そう…ね、確かにあの子は久々に鍛え概のある子だったわ。剣道の才能も、もしかしたら私異常かも…」

「ほう！」

タマキの父は驚いた。なにしろ自分以上の才能を持つ椿が、リュウマを自分以上の才能があると言ってるのだから。

「それに何より彼は、他の人よりも集中力がある。それがリュウマ君の武器」

「では、将来が楽しみだな。君が言うぐらいなのだからね」

「ええ、でもそれは彼次第だけど」

「ああ…そうだね…」

川添夫婦は、共に我が娘タマキと赤髪の少年リュウマを見つめながら微笑んでいた。

空は夕暮れからなお薄暗くなり、一番星が輝いていた。

## 第1話：不幸の連続（前書き）

第0話ではリュウマとタマキの小さい頃の話でしたが、今回からは原作と同じ高校生になったリュウマ達のお話です。それを踏まえてお読み下さい。

## 第1話：不幸の連続

雲一つない空の下、一台のバイクが太陽の陽射しを受けシルバーのボディを輝かせながら黒いライダースーツに身を包んだ青年を乗せ道路を疾走していた。

バイクはゆっくりとスピードを落として路肩に寄せて止まった。止まると、バイクに乗っていた青年はヘルメットを脱ぎ溜め息を吐いた。

ヘルメットを脱いだ青年の髪は赤く、太陽の陽光により輝いている。

赤髪の青年、いや成長した龍真<sup>リュウマ</sup>は顔を空に向け大きく息を吸い天に叫んだ。

そう、ただ一言だけ。

「迷った〜!!!」

現在、龍真は迷子中。二、三時間ほど……。

普通なら、道端でいきなり叫んだりすれば変人扱いであるが、幸いここはあまり人が通らないのか現在には人一人いない。

そのおかげで、龍真は変人と言う称号を得ずに済んだ。

しかし、当の本人の龍真はそんなことなど気にした風もなく地図を取り出して、バイクから降り辺りを見渡した。



「おつかしいなあ〜？ 何で？ 何で着けへんねん」

ガシガシと自身の頭を掻き、地図を広げながら首を傾ぐ龍真。すると、地図の間から小さく折りたたんだ一枚の紙が音もなくヒラヒラと地面に落ちた。

「ん？」

落ちた紙に気付いた龍真は身を屈めその紙を手に取り、小さく折りたたんでいたためその紙を広げ始めた。

「何や？ こんなんいつ挟まつ…た……………」

紙を広げた瞬間、龍真の思考がフリーズした。それも綺麗に、まるで彫刻のようにピクリとも動かない。

思考がフリーズしてどれくらい時間が経過したか、ハツとして思考が一気に頭の中で加速し始めもう一度その紙を凝視した。それはもう、その紙が龍真の視線で穴が開くのではと思うくらいにジューツと。

そして、紙から視線を離れた龍真は顔を俯かせ体全体をブルブルと震わせていたが、龍真はバツと顔を上げ再び天に向け叫んだ。

「あんのクソ親父いい！！！！ 何さらしとんねんアホーーーー！！！！！！！！」

龍真、今回二度目の叫び。

龍真は、再びその紙を見つめていた。その顔はもう怒りを通り過ぎて呆れという言葉が妥当だった。

「……………」

無言。

龍真は一言も言葉を発せず、先程思考がフリーズした時のように動かないでジッと紙を見つめている。

ービキツ！ー

瞬間、龍真の額に青筋が浮き上がった。

「っだー！！ また腹立ってきたわ！」

龍真はそう言うと、その紙を勢い良く地面に叩きつけた。

地面に叩きつけた紙にはこう書かれていた。

『その地図、五年前のやから。これで着けたら奇跡やのゝ 食  
いもん（プリン）の恨みは恐ろしいでゝ。…………じゃっ、そゆこ  
とで！ by・愛しの父より』

一瞬、異常なまでの笑顔の親父が見えた。そして、龍真は思った。

あ 何かムカつく

そしてまた、龍真の怒りが沸点に達した。 っていうか通り過ぎた。

「ああ、確かに愛しいのう……射殺したいほどに……。　　ってか、まだあの時の風美堂のプリン食ってもうたこと根にもっとるんか！いくらなんでも長すぎやろ！　それに、食いもんプリン限定やんけ！　　なんや（プリン）って！　プリン強調しすぎやねん！」

右手に握り拳を作り、今この場にいない父に突っ込む龍真。

「それに、五年前の地図って俺を迷わせる気満載やんけ！　　というより自分も早よ気付けや！　　自分のアホー！」

最後には、肩でハアハアと息をしながら自分にも突っ込む始末。

次第に落ち着いてきたのか、龍真はハアとため息をつき停めてある自身のバイクに寄りかかった。

「もういいわ。　　今更でない言うても仕方あらへんし、取り敢えず誰かに道でも聞いて……」

辺りを見渡す。……誰もない、人っ子一人、目の前を野良猫が一匹通り過ぎていく。しかも黒猫……。

「誰もおらんって……まあ黒猫が通って不吉とかは取り敢えずスルーしとこ、これ以上突っ込んでたら身が保てへんし……」

そう自分に言い聞かせるように呟く龍真は、直ぐに思考を切り替え他に道を知る方法を思索した。

首を傾げ、うーんと唸りながら考えていた龍真は何か思いついたのかポンと手のひらを叩いた。

「そうやん！ 交番や！ 道に迷った時は交番や！ 何で気付けへんかってん」

あはははは、と笑いながら無事に解決！みたいな顔で頬をポリポリと搔いている龍真だが一つ肝心なことを忘れていた。

そのことに気が付いたのかハツとして呟く。

「…交番の場所…知らん…」

沈んだ。ズーンと音が聞こえてきそうなくらいに、龍真は膝を折り両手と膝を地につけ重い空気を背負いながら…沈んだ。

しかし、龍真は諦めなかった。不屈の精神で立ち上がった！

「まだや…まだ何か方法がある。 ……そうや！ この地図を見れば……って！ 五年前の地図やったあゝ！」

折れた。龍真の不屈の精神も完璧に、それはもうポッキリと。

「あかん…八方塞がりや……ああああ、どないすればええねん！？」

すべて手を尽くした龍真は、かなりテンパっていた。だから、後ろから近づいてくる人影に龍真は気が付かなかった。

「ちょっと、君？」

人影が龍真に話しかけてきた。しかし、龍真はかなりテンパって

いるため全くその声が耳に入っていない。

「ああああ！ 誰か、この状況なんとかしてー！！ お巡りさん  
！！」

半泣きになりながら助けを請う龍真。……まあ何と云うか、フア  
イト！

龍真が助けを請うている最中、後ろにいる人影は龍真のその姿を  
見てどこか可哀相なものを見る目で見つめていた。

そして、人影は龍真の肩にポンと手を置き再び声をかけた。

「だ、大丈夫か？ 君？」

「うひゃい！？」

テンパっているところへ、いきなり声をかけられた龍真はビクッ  
と体全体を大きく震わせ変な声を出してしまった。

そして、ゆっくりと振り向いた龍真の見た先には……………。

「へ？ お巡り…さん？」

そこに立っていたのは紺色の帽子と制服を着ている中年のお巡り  
さんだった。

龍真は何故そこにお巡りさんがいるのか分からず少し固まってい  
たが、しばらくして俯きプルプルと震えながら小さく言葉を漏らし  
た。

「か…」

「君？」

「神様ありがとう！！！！」

龍真、これまでの中で一番の叫びをあげた。心の底から…。

龍真の叫びを聞いた中年のお巡りさんは、ビクツと一度身を震わせ一歩下がってしまっていた。

しかし、中年のお巡りさんは臆さずにまだ「神様ありがとう！！！！」と連呼して天を仰いでいる龍真へと声をかけた。

「君、ちょっと良いかね？」

「へ？ あ、ああ！ はいはいはい！ すんません、一人で盛り上がってもうて。」

なはは、と笑いながら頭を掻いた。

「まあ、別に良いんだけどね。そんなことよりもね、さっきこの辺りの住民の人から通報したがあってね」

そう龍真に告げると、中年のお巡りさんはポケットから警察手帳を取り出しパラパラとめくり始めた。

「通報ですか？」

「そう、通報。なんでも家の外の道路で大声で叫んでいる人がいるそうなんだけどね」

「へえ、迷惑な人もおるもんですね」

龍真は、うんうんと頭の縦にふり頷いている。

「で、その人物の特徴だけどね、身長は大体185センチ…」

「ほうほう、自分と同じくらいですね」

「関西弁を使っている…」

「ムッ！ 同郷もんですか？ 関西の者として恥ずかしいですわ」

龍真は、怒った顔をしながら再びうんうんと頭を縦にふり頷いた。

「そして、黒いライダースーツを着た…」

「……ん？……、何か雲行き怪しくない？、と一人心中で呟く龍真。

そして、その疑問を打ち払うかのようにお巡りさんは開けていた警察手帳を閉じて視線を手帳から龍真へと移し、一呼吸おいてから喋り始めた。

「…赤い髪をした青年だそうだ…」

「……………」

「……………」

沈黙。

龍真とお巡りさんの間で沈黙が流れた。しかし、その沈黙を先に破ったのは龍真からだった。

「えっと…、身長が185センチくらいで…」

その人物の特徴をゆつくりと復唱していく龍真。

「か、関西弁を使うとって…」

その龍真の言葉に、肯定の意味を込めて頷き返すお巡りさん。

「黒いライダースーツを着た…」

俯き、自身の着ている衣服を見る。

「赤い髪をした青年…」

そして、自身の髪に手を振れる龍真。

ゆつくりと龍真は目をつぶり、冷や汗を流しながらウーンと唸りながら首を傾げていたが、ゆつくりと目を開き自身を指差しながら呟いた。

「……………俺?……………」

お巡りさんは、先程よりも深く頷いた。



「……………」

「……………」

再び二人の間に沈黙が流れた。先程は、龍真から喋り始めたが今回はお巡りさんの方が先だった。

「まあ、とりあえず詳しいことは交番のほうで聞こうか？」

お巡りさんは、龍真の手をとり歩き始めた。

「へ？ あっ！ ちょっと待って！」

少し抵抗しようとする龍真だが、先程の叫び声にとてつもなく身に覚えがあるため強く抵抗出来ない。そして結局…。

「来なさい。」

「は！ はい！！！」

お巡りさんの笑顔と言う名の威圧に負け龍真は交番へと向かった。

「何や、この展開は〜！？」

最後に、龍真の叫びだけがその場に響いた。

そして、当初とは違う形で交番の場所を知る龍真であった。

ゴシユウシヨウサマデス。

「こら！ 作者お前謝る気ぜろやろ！」

.....。

「だんまりか〜！」

チャンチャン

「チャンチャン っやないわ〜！」

## 第1話：不幸の連続（後書き）

…え、思わぬハプニングでリュウマがお巡りさんに連れていかれたわけですが……まっ！面白そうだからいつか

「めちゃくちや作為的やろがぁー！」

あ、まだいたの？

「ひどっ！」

では、次回もリュウマの不幸をお楽しみ下さい

「続くかー！！！」

**第2話：到着！川添道場！出発！室江高校！（前書き）**

二月中に仕上げる予定が三月に…急いで仕上げたので変な所もある  
かと思いますが、それでも良ければお読み下さい。

## 第2話：到着！川添道場！出発！室江高校！

リュウマがお巡りさんに連れていかれた時間より少し戻って朝、場所はとある道場。道場の名は川添道場。

そのこの一人娘、川添珠姫は久しぶりに夢を見た。懐かしい夢だった。幼い頃の、母に道場で剣道を教えてもらっていた頃の夢。

そこには、幼い頃の自分と、笑顔で竹刀を振るう母・椿。そんな母に必死に一本を取ろうと竹刀を振り上げる赤い髪の少年の姿があった。

タマキ自身、その光景は臍げにだが覚えていた。ただ、その少年の顔と名前だけがよく思い出せない。

いつの間にか稽古が終わったのかその少年が自分に近づいて来ていたが、後ろからの夕陽が眩しくよく顔が見えない。自分の真正面に立った赤髪の少年はゆっくりとタマキの方へと手を上げ、タマキの頭をふわりと撫でた。優しく、温かい撫で方だと感じただけでも分かった。

何処かくすぐつたかと思い、自然と顔を上げたタマキは少年の口元が見え笑みを浮かべているのが陽が陰ってきたおかげで分かった。その笑みもまた、優しさと温かさが滲み出ている。タマキはただじつとその笑みに見入ってしまった。そして何を考えるでもなく見つめていると、そのままゆっくりと視界がぼやけタマキは夢から覚めていった。

「……誰だっ たっ け？」

そう呟きながらタマキは、朝食を食べながら今朝見た夢を思い返していた。しかし、考えても一向に思い出す事が出来ずまあいいやと、心の中で思い朝食を再び食べ始めた。

「どうかしたのかい？ タマキ」

ふと、タマキが箸を進ませようとした時心配そうな声で喋りかけてくる男性がいた。それは、タマキの正面に座り同じく朝食を食べていたタマキの父であった。

「箸が進んでいなかったのな、どうかしたのかい？」

気遣うようにタマキの父は、自身の箸を置きタマキに再び聞き返していた。

「あ、ううん。別に何でもないです。ただ考え事してただけだし……」

タマキがそう言うと父はホッと息づき「そ、そうか」と安堵していた。

二人は食事をする間も互いに一言も会話をせず、時計の秒針が進む音と鳥の鳴き声だけが寂しく聞こえてきていた。この空気に耐え

切れなくなっただのか、タマキの父はゆっくりと口を開きタマキに喋りかけた。

「そ、そうだタマキ、昨日の晩の話だが……」

「はい?……」

唐突に話し掛けられたタマキは、返事はしたものの何の話なのか分からず頭に疑問符を浮かべていた。

「昨日の晩、話しただろう? 学校では剣道部に入らないのか?、と」

「あ、はい」

タマキは思い出したのか小さく頷き肯定を表した。しかしタマキは何故また同じことを聞いてくるのか分からず不思議そうに聞き返した。

「昨日も言いましたが、家で毎日やっているのにどうして入るんですか?」

「ん……学校の方が家とは違って同世代の子達がたくさんいるだろうし、それに……楽しいぞきつと」

「……楽しい?」

味噌汁を啜りながらタマキの父はそう言うが、タマキ自身は楽しいというのがイマイチ分からない。剣道は家でのお手伝いの考えにしているタマキにとっては家以外で何故剣道をしなければならぬの

か、そして何故同世代の子達と剣道をすると楽しいのか、考えてみるもやはり分からなかった。

「……？」

「まあ、……いい。それよりもタマキ、そろそろ学校の時間ではないのか？」

タマキは時計を見ると、確かにいつも学校に行く時間だった。

「あ、はい。ごちそうさまでした」

椅子から立ち上がり、鞆を取ったタマキは少し父に振り向き「それでは行ってきます」と言い残し玄関へと向かっていった。

タマキを見送った父は、小さく溜息を漏らしていた。

「……昨日と似た会話になってしまった。母さん…年頃の娘との会話は難しいな」

再び溜息をつくタマキの父だったが、その時今の暗い空気を断ち切るようにプルルル…と、電話独特の電子音が響いた。

「ん…、電話か」

そう言っただけでタマキの父は立ち上がり電話の方へと向かい、受話器を取った。

「はい、川添ですが……！ ああ久しぶりだな。元気だったか？」



知り合いからなのか、先程の暗い空気とは明らかに違い、心底嬉しそうにタマキの父は喋っていた。

「ああ……えっ！……そうなのか、またそれは大変だな。……何？  
リュウマ君が？ ……別に私は構わないが……分かった……  
ああ……じゃあ……」

ガチャ、と音をたて受話器を置いたタマキの父は先程の会話を思い出しながら少し苦笑していた。

「大変だな、リュウマ君も……」

今この場にはいないリュウマに、同情の色が隠せないタマキ父であった。

「ふむ……遅いな、リュウマ君は」

お昼が過ぎて現在午後二時を回っていた頃、タマキ父は道場の入口に立っていた。

「電話で聞いた時間を大分過ぎているが…」

一人呟きながら辺りを見渡すがそれらしい姿は見えなかった。タマキ父は少し困り顔をしていると後ろから声を掛けられた。

「あれ？ どうなされたんですか？ 川添さん」

その声に振り向くとそこには、剣道具を担いだ中年のおじさんが立っていた。

「ああ、どうも坂口さん。どうしたんですか？ 今日はいつもより早いようですが」

少し驚きながら、突然現れた坂口さんと呼ばれた中年のおじさんにタマキ父は聞き返していた。

「いや、配達が早く終わってしまったのでそのまま車で来たんですよ」

坂口さんは笑いながら、人差し指をたて後ろを指差した。そこには、坂口剣道具店と描かれたミニバンが止まっていた。

「で、なにされてるんですか？」

再び疑問そうに坂口さんに聞かれたタマキ父は困った顔に戻り事情を話し始めた。

「いや、実は今日知り合いの子がこっちに来るんですがね…」

「はあ、だから外でこうして待っていると…」

剣道具を地面に置きながら坂口さんはなるほど軽く頷いていた。だが、タマキ父は首を横に振った。

「いや、予定の時間を二時間も過ぎても姿を見せないの心配になっ  
てね」

「二時間もですか。それは確かに心配になりますね」

坂口さんは、うーんと唸りながら考えていたがなにか思い付いたのか声をあげた。

「その子の特徴とかないんですか？　もしかしたら配達途中で見かけてるかもしれませんし」

坂口さんの言葉を聞き次はタマキ父がうーんと唸っていた。

「特徴：ですか、そうですね…その子と会うのは十年以上経っているから今はどうかかわからんが昔と変わっていなければ………赤い髪が特徴的な男の子だったね」

「あ、赤い髪ですか」

赤い髪と聞いて少し困惑気味になる坂口さん。その表情を見てタマキ父は苦笑した。

「不良とかじゃないですよ。まあ、少し変わった子ではあったが素直で良い子でしたよ」

タマキ父に、そう促され坂口さんは安堵した顔になった。

「そ、そうですか。でも赤い髪ですか…そんな目立つ色してたら大分分かりやすいと思いますが見てないですね」

そうですかと、少しは期待していたのかタマキ父は小さく溜息を  
はいた。

「まあ、気長に待つしかないですかね」

「そ、そうですね、待つのも大事ですしね。はっはっはっ！」

坂口さんは場を明るくしようと大きく笑った。

「はっはっは……………」

しかし、坂口さんは笑いをピタリと止めて目を見開き固まっていた。それを見たタマキ父は不思議そうに聞いた。

「…………？ どうしました？ 坂口さん」

「確か、その子の特徴って赤い髪…………でした…よね」

「え？ ええ、そうですが…」

そう言つと、坂口さんは人差し指を立ててタマキ父の後ろを指差していた。その指差す方へと振り向くとその先には、何故かにこやかにお巡りさんと一緒に歩きながらバイクを押して来る赤髪の青年、リュウマがいた。

「ん？ あ！ 先生…！！」

お巡りさんと楽しそうに喋ってたリュウマはこちらに気が付いたのか、片手を上げてブンブンと大きく振っていた。

「いやゝ、久しぶりです！ 先生」

タマキ父の前まで来たリュウマはバイクを傍らに止め、笑顔で喋ってきた。

「お、大きくなったねリュウマ君」

「まあ、もう自分今年で高二やし、当然っすわ」

はっはっはつと、笑いながら頭を掻いているリュウマを見てタマキ父は、予想以上に成長して大きくなっていたことも驚いていたが、現在疑問だったことを聞いてみることにした。

「し、しかし予定の時間を大分過ぎているが何かあったのかい？」

タマキ父がそう聞くや否や、リュウマの笑いがピタリと止まった。そして正面を向いていたリュウマの顔が段々下を向いていき、明るかった顔がいつの間にか残業続きで疲れきった中年サラリーマンのような顔になっていた。

「いや……まあ……いろいろと……狡猾な罠にハマったと言うかなんと言うか……」

極めつけには地面にの字を書きながらハハハツと乾いた笑いを漏らしていた。その話は触れてはいけないものだと思ったタマキ父は咄嗟に、目が合ったリュウマの姿を見て苦笑しているお巡りさんに話を振った。しかし、よく見るとそのお巡りさんも見覚えがあっ

た。

「よく見れば黒沢君じゃないか。君がリュウマ君を連れて来てくれたのか」

「どうも、川添さん」

黒沢正義巡查長、四十五歳・妻子持ちで息子と共に川添道場に通う一人である。

「いや、別件でこの子と知り合っただんですがね」

そう言いながらリュウマに視線を向け苦笑いを絶やさない黒沢さん。

「交番に彼を連れて行って話を聞いていたんですが、川添道場へ行きたいと言うことだったので……ほらリュウマ君もいじめてないでほら立つ！」

黒沢さんはそう言ってリュウマのその赤い髪をポンポンと叩いた。その二人の姿を見たタマキ父はまた驚いていた。

「また随分…仲良くなってるね」

二人にそう言うと、いつの間にか機嫌が直ったのか先程の笑顔に戻っていたリュウマが口を開いた。

「交番で黒沢のおっちゃんと話してたらいつの間にか仲良うなってもうて」

ハハハツと明るく笑っていたリュウマにつられてか、タマキ父も苦笑混じりに笑っていた。

「まあ、何もなくて何よりだ」

そう言いながら三人は話を弾ませていく。しかし、ここで完全に存在を忘れられていた坂口さんが恐る恐る声を掛けた。

「あ、あの～よろしいですか？」

そう言つと三人は同時に顔を振り向かせた。タマキ父はすまなそうな顔して、リュウマは誰？という顔をしていた。

「すみません坂口さん、話に夢中になってしまつて」

恐縮そうに言うタマキ父を見て坂口さんはいえいえと手を振っていた。

「彼、さつき川添さんのこと先生と呼んでいたので気になつて……」

坂口さんの疑問にタマキ父はなるほどと頷き、その疑問を答えた。

「昔、リュウマ君もここに通っていたんですよ。だから私のことを先生と呼ぶんです」

簡潔に答えたタマキ父の言葉を聞き、納得したようで坂口さんは頷いていた。すると、そう頷いていた坂口さんに唐突に下から声を掛けてきた人物がいた。

「おっちゃんも剣道するんか？」

その声にビクツと身を震わせた坂口さんは、下をゆっくりと見るとそこには、しゃがみ込んで地面に置いてあった剣道具をポンポンと叩いていたリュウマがいた。驚いている坂口さんを無視してリュウマは、言葉を続けた。

「おっちゃん、強いんか？」

「なあ〜？」と聞いてきた所で、坂口さんはハツとして頷いてみせた。そこで、傍らで呆然としていたタマキ父も復活し口を開いた。

「坂口さんは有段者だから強いよ、リュウマ君」

そう聞くや、リュウマは目をキラキラと輝かしていたが、次にうんと唸って何か考えていた。そして、結論が出たのかリュウマはよし！と頷き、言葉を発した。

「よし！ おっちゃん、試合しよか！」

「「「はい？」」」

リュウマのその一言で坂口さんは勿論、タマキ父も傍観していた黒沢さんさえも聞き返していた。

「いや、だから試合。おっちゃん強いんやろ？ やったらしようや」笑顔で坂口さんにそう言うリュウマを見て、タマキ父は遠慮がちに声を掛けた。

「で、でもリュウマ君。君このあと編入手続きをしに学校に行くんじゃない？」



そう、リュウマはこの町に引越して来たため、学校の編入手続きをこのあとに行く予定だった。しかし、リュウマは笑顔で大丈夫と言っている。

「時間もまだあるし、それに自分にはコイツがあるし」

リュウマの指差す先にはシルバーのボディーが輝くバイクが止まっていた。バイクからリュウマへと視線を戻すタマキ父は何処か諦めたような顔して、坂口さんに顔を向けた。

「すみませんが、宜しいですか？　こうなると聞かない子でして」

「別に良いですよ。何、私が稽古をつけてあげますよ。あゝはっはっはっ！……！」

「負けまへんで！　先生、道具一式お借りしますね」

坂口さんは笑いながらリュウマと共に道場へと入っていった。有段者である坂口さんはリュウマを見てこう思ったのだろう、『ガタイは良いが有段者である私が早々に負けるはずもない！』と。その油断が命取りとも知らずに……

「じゃあ、ちょっと学校の方に行ってきます」

そう言いながらリュウマは、バイクの独特のエンジン音を響かせながらヘルメットを被っていた。

「ああ、いつてらっしゃい。気をつけてな……ああそれと、もしかしたら学校でタマキに会つかもしれんから」

「ホンマですか!？ では、行ってきます!！」

タマキ父が言い終わる前にリュウマは、バイクを物凄いスピードでとばし直ぐに見えなくなった。

しかし……………。

「室江高ってどっちですか？」

直ぐに帰ってきた。室江高の場所を聞くと先程と同じように、猛スピードで走り去った。

「まったく、忙しい子だな」

バイクが走り去った方向を見据えながら微笑んでいたタマキ父は、さて一言呟き道場の中に入っていた。

「…………大丈夫ですか？ 坂口さん」

タマキ父は、道場の中にいる坂口さんに喋り掛けた。坂口さんは、面を外し腰が抜けたようにペタンと座り込んでいる状態で、顔は呆然としていた。だが坂口さんはゆっくりとタマキ父の方を向き、口を開いた。

「……あの子、何者です？ あんなの反則級ですよ……。雰囲気なんて、剣道している時のタマちゃんに似てましたけど……。いや、どちらかと言うと………」

ブツブツと一人言のように呟いている坂口さんを見て、タマキ父も先程の試合を思い返しながらその感想を坂口さんにも聞こえるぐらいの声で呟いた。

「…私も、リュウマ君の試合を見るのは久しぶりだったが……。随分と、いや…とても強くなっていたな。流石、母さんが…椿が見込んだ子…と言うべきかな」

タマキ父の言葉に坂口さんは直ぐさま反応し、驚いていた。

「椿ちゃんがですか!？」

「ええ、リュウマ君大分気に入られてましたし…母さんにもそして、タマキにも……」

その言葉を聞いて坂口さんは、ハアと言いながら黙って聞いていた。

そして、道場にいる二人は同時にバイクに乗り赤い髪たなびかせる青年の姿を思い返していた。



## 第2話：到着！川添道場！出発！室江高校！（後書き）

今回はやっと、室江高が舞台です。あのキャラ達をやっと出せる…では次回も

「なあ？」

なに？今忙しいんだけど。

「いや、素朴な質問なんやけど…黒沢のおっちゃんどこいったん？途中で消えたけど」

仕事中だからって、帰ったけど……

「ふん、じゃあなんでその場面書いてへんの？」

……、では次回も楽しみに。評価・感想も待ってます！

「忘れとつたな……」

### 第3話・出会いと衝撃の再会（前書き）

今回は、案外早めに仕上がりました！自分でも驚きです。興味があれば見てやって下さい。

### 第3話：出会いと衝撃の再会

えゝ、どうもゝ赤髪青年ことリュウマです。川添道場から、バイクをかつ飛ばして室江高に到着したんは良いんやけど……

「職員室つて、どっちやる？」

現在、校舎の中をさ迷っているわけで。まあ今回は、周りに生徒もおるし聞けば分かるやろうと思って近くにおった男子生徒に声をかけたんやけど……………。

「あのゝ、すみません」

「！……………」

目合わせた瞬間に顔逸らして、物凄い勢いで歩いて行きよった……………。

俺、何かしたっけ？つと言っか、さっきから何人かに声掛けとるけど全員同じ反応やねんけど。あっ！でも、男子と女子やったら微妙に反応が違つとったな。男子は直ぐさま顔逸らしてどっか行くのに、女子の場合は顔合つた瞬間しばらくこっち見とつたと思つたら、顔少し赤くしてキヤーとかいって走っていったっけ。…………やっぱり、この赤髪で爽やかな笑顔があかんのか？

「あのゝ、どうしたんですか？　うちの学校に何か御用ですか？」

リュウマがどうしたものかと、頭を悩ましていると後ろから声が掛かった。振り向くと、そこには丸眼鏡と泣きボクロが印象的な少女が立っていた。

「いや、職員室に行きたいんやけど、わからんで」

そうリュウマが用件を答えると、泣きボクロの少女はじっとこちらを見て軽く頷いた。

「……分かりました。それじゃ、私が案内しましょうか？」

「えっ！？ 良いんか？」

「はい！ それくらいお安い御用です！」

リュウマは思った。面倒見の良い子だなと。

「じゃあ、こっちで！！ キャー！！」

泣きボクロの少女は、見事なまでに転んだ。それも、なんにもない所で頭から綺麗に滑り込んでいた。

「いたた、また転んでしまった」

リュウマは、苦笑いしながら頭を摩っている少女に手を差し延べた。

「大丈夫か？ ……え」と

リュウマは、その少女の名前を呼ぼうとしたが聞いていないのに気付き言葉が詰まった。その様子を見た少女も、そのことに気付き頭を摩り続けながら答えた。

「東……東聡莉です」



スメラギリユウマ  
「皇龍真や。ヨロシク」

その後、二人で職員室へ向かったのだが、向かう最中サトリは何度もなにもない所で転んでいた。リユウマの中でサトリの印象にドジッ子がプラスされたのだった。

「では、これで編入手続きと連絡事項は終了です。他に何か聞きたいことは有りますか？」

サトリと共に無事？職員室に着いたリユウマは、案内してもらったサトリに軽く礼を言い、別れ今は編入手続きを終えて制服や教科書といった支給品の連絡事項を聞いた後だった。

「いえ、特には……………あつ、出来れば剣道部の場所教えてもらえば」

「剣道部？ あゝ、それだったら丁度顧問の先生いるから。石田先生？」

「……………」

編入手続きをしていた先生が、顧問の石田先生なる人を呼ぶが一向に返事は返ってこない。すると、二人が視線を向けている方とは逆から声が掛かった。

「石田先生なら、先程お手洗いにきましたよ？」

その声に、視線を石田先生なる人の机に向けていた二人はくるりと振り向くとそこには、若い女性の先生が教材を持ちながら立っていた。

「吉河先生、そうですか石田先生今席外してるんですか」

「どうしたんですか？ 石田先生に何か用事か何かですか？」

吉河先生と呼ばれた女性の先生は、疑問に思ったのか聞き返してきた。

「いえ、この子が剣道部に行きたいと言うので石田先生に案内してもらおうと思ったんですが……」

「この子？」

編入手続きをしていた先生から、視線をリュウマに向けて吉河先生はじつと見た。その視線を受けたリュウマは、自身も顔を吉河先生に向けてニコツと笑い、もう一人の先生に視線を戻して口を開いた。

「いらっしやらないんですたら、別に良いです。学校見て回るつい

でに、自分で探しますので……ではこれで、失礼しました」

リュウマはそう言うと、ゆっくりと立ち上がり出入口に向かい、一度軽く頭を下げて職員室を出ていった。

職員室から出てきたリュウマは、笑顔だった顔を崩してブハーと息を吐き、大きく伸びをした。

「ん〜！ 疲れた。まあ、先生の前では少しくらい真正面にしゃんとな……ただでさえ目立つ髪やし〜」

そう言いながら、自身の髪を指でいじくりながらリュウマはその場を後にした。

学校内をぶらぶらと回っていたリュウマは、意外にも直ぐに剣道部を見付けた。

「ここか？ さっきから竹刀の音しとるし」

リュウマの言う通りその場所、武道館と記された場所からパシイ、

パンという竹刀が出す独特の音が響いていた。その音に釣られるようにリュウマは、武道館に入ってしまった。

リュウマは靴を脱ぎ、目を前に向けると剣道部の生徒か、一人の男子生徒がこちらに背を向けて剣道部の扉を開き立っていた。ゆっくりとその男子生徒の後ろに行き、リュウマは身長が自分より頭一個分低い、前にいる生徒のおかげで中の様子が伺えた。その中では、体格的にそして身長的に差がある二人が試合をしていた。

試合をしている大きい方（男子とリュウマは断定）は、小柄な方（こちらは女子と断定）を力で押し勝とうとしているが、小柄な方の女子はその一撃一撃を全て受け切っていた。

（お互い、経験者やな。普通やったら、男子が勝つんやろうけど……）

そう思っていた直後、間合いを取っていた男子が手に力を入れて竹刀を振り上げ相手に向かい、踏み込んだ。しかしその瞬間、女子の方は男子の振り上げた時に合わせ胴に打ち込んだ。その一撃を目にしたリュウマは、ただこう一言呟いた。

「「お見事」「」

前にいた男子生徒と言葉が重なり、男子生徒の方は驚き後ろを振り向いた。見上げる形になっている男子生徒を見たリュウマは笑顔で挨拶をした。

「どうも」

「ど、どうも」

「こんな所で見てやんと、中で見ようや」

男子生徒に、そう促したリュウマは背中を押して中に入っていた。そして、その男子生徒の横に移動して座り込み試合を見つめた。すると、横からリュウマに声が掛かった。

「あゝ、貴方誰ですか？」

その声を掛けてきたのは、人懐っこい顔に長髪に見える大きなリボンをして、剣道部員なのだろう剣道着を着た少女がこちらに喋りかけてきた。リュウマは、くるりと顔を向けてその少女にニコリと笑った。すると、少女は頬をポツと赤く染め上げた。

「俺？ 俺、皇龍真。リュウマで良いで。ヨロシク」

手をプラプラと横に振り、笑顔で挨拶を交わして後ろにいた三人にも笑顔で「ヨロシク」と手を振っていた。すると、少女はハツと我に帰ったような顔をして直ぐさまリュウマの笑顔のお返しのように笑顔で元気良く挨拶を交わしてくれた。

「あゝ、私は千葉紀梨乃。この剣道部の部長です。キリノで良いよ！ で、後ろにいるのがユージ君で可愛い子がミヤミヤ、で最後にダン君！」

キリノが、全員の紹介を済ませると三人共が軽く会釈した。すると、ユージが疑問化にリュウマに喋り掛けてきた。

「えゝっと、それでリュウマさんはどうしてここに？」

リュウマはいつの間にか前を向き、試合を見ていた。そして顎に手を添えながら、ユージの問いに答えた。

「ん？ あゝ自分、今日ここに転校してきてな、その手続きにな」

キリノ達は、リュウマの言葉を聞きへえと頷いていた。

「そんなことより、アレ良いんか？ 仕切り直してへんけど」

「え！？ こら外山君！」

キリノが外山という男子に声を荒げるが、そんなもの聞こえていないというように攻め続ける。しばらくの攻めに耐えた相手の女子は、外山と間合いを空けた。その行動を見た外山は挑発するように声を掛けていた。

「どうした、さっきから。打ち込んでこいよ、川添さん」

外山の発した人物の名にリュウマは一瞬、眉をひそめた。

（川添？ あいつ今、川添言ったような……）

リュウマは、この疑問に応えられるだろうキリノ達へと声を向けた。

「なあ、もしかして……川添って、川添珠姫？」

外山に川添と呼ばれた少女をリュウマは指差しながら聞くと、ユージは驚いたように聞き返してきた。

「そうですけど、リュウマさんはタマちゃんのこと知ってるんです

か？」

「へえ、そうか…タマキやったんか。それやったら、この勝負…」

ユージが、リュウマへと聞き返しているがリュウマはもう聞こえていないようで、顔は先程とは違う笑顔でブツブツと呟いている。

すると、試合に動きがあった。再度しかけようと、外山が踏み出す。だが、タマキは再び先程外山に打ち込んだ時と同じように面に一撃打ち込んだ。しかし、タマキはそこでは止まらなかった。外山が振り向くのと同時に二撃！、そして切り返すように三撃目を繰り出した！。

タマキに連続で三撃も喰らった外山は、しばらく固まっていたがゆっくり口を開いた。

「……で？ 別に…痛くもなんともねえよ」

振り向き様に怒りを含みながらそう発する外山は、言い終えるとタマキに向けて力の限り打ち下ろした。だがその一撃さえもタマキは難無く受け止める。それを見た外山はタマキに向けて吠えながら打ち続けた。

「かなりやってるみてーだな、んじゃ試合じゃ俺が敵うわけねえな！」

しかしタマキは外山が吠えるも、汗一つかかずにその一撃一撃を冷静に見極める。

「でもおめエ弱エよ！ 効かねえよ！ そんな軽イの！！」

全てを受け切りながらタマキは後ろへ引いていくが、突然体勢を崩した。それを見た外山は、そのまま竹刀を振り下ろした。だがタマキは焦らずに竹刀を前に出し、振り下ろされた竹刀をしっかりと受け止めた。

「あらら？ タマちゃんコケちゃったよ」

ユージがタマキの姿を見てポツリと呟く。

「あちゃー、やっぱり」

そうキリノが言うと、ユージは不思議そうな顔で見た。

「タマちゃんに合う袴がなくってさ、裾踏ん付けちゃうんだよ。あれじゃ」

その言葉を聞いたユージは、納得したように頷いた。

「ああ、なるほど。どうりでいまいち動きが悪いわけだ」

ユージがそう呟く中、外山は立ち上がったタマキを攻め続ける。そんな攻めにも全て受け切るタマキだが、やはり袴の裾を踏んでしまふのか少しよろめいている。そこに更に力を入れて攻めていく外山。その光景を見たキリノは、あうあうと言いながらうつろたえている。

「力まかせに押してきたよ。危ないかな」



今まで、タマキ達の試合を見て一言も喋らなかったリュウマは、そのキリノの様子を見て微笑を浮かべながら呟いていた。

「いやあ、大丈夫やる。なあ、ユージ君」

リュウマがそうユージに話を振ると、ユージは力強く頷いた。

「ええ、たいしたハンデじゃないでしょう」

そうユージが言うや否や、武道館内にスパアンと綺麗な胴の入る音が響いた。再び一本を取られた外山は、更に攻撃の一手を荒く振り下ろしていく。

しかし、外山も攻め疲れたのか攻撃の手を止めて間合いを空けた。その光景をさっきまでの笑顔とは違い、つまらなそうな顔して見つめていたリュウマがキリノに喋り掛けた。

「なあ部長さん、そろそろ止めた方が良いと思うんやけど」

ピツと指を外山達の方をリュウマが指すと、キリノもその意味が分かっているようで軽く頷き、「だね」と肯定を表す。更に、ユージもまたその言葉の続きのように言葉を漏らす。

「そうですね。外山先輩のために……」

「だね」と再び言葉を漏らしたキリノは意を決したように笑顔で外山とタマキに喋り掛けた。

「いやータマちゃん、外山くんお疲れさん。暑いね、疲れたねー。ここらへんで一服いただきますかー!!! ほーら、花粉症に効くしそ

ジューズだよー!!」

「.....」

「.....」

無言。というよりキリノ自身を二人は見えていない。無視されたせいか、キリノはしそジューズを持ったまま固まっている。更には、その空気を読んでないように隣にいたダンが「俺、もらっていい？」と聞いている始末だった。なにげにリュウマも便乗してしそジューズを貰っている。

リュウマとダンがしそジューズをチューチューと飲んでいると外山が先に動き、面を取りに行った。一方のタマキは、冷静に何かを見極めている。そんなタマキの様子を見つめるリュウマは思った。

（何か、狙っとんな）

そう思つのもつかの間、タマキは竹刀を突き出しながら力強く踏み出して相手の喉元を竹刀で、文字通り《突き》を繰り出した。

「アトミックファイヤーブレード.....」

その瞬間、リュウマはタマキにブレイバーが重なって見え、ポツリと小さく呟いていた。

タマキの突きを喰らった外山は、少し体が浮き仰向けに倒れこんだ。それに合わせるように入口の扉がガラリと開いた。そこから現れたのは、ネクタイをつけずにスーツを着ている短髪の男性だった。

「あれ？」

短髪の男性がそう一言呟くと、壁にもたれ掛かっていたもう一人の男子生徒、岩佐が笑いながら倒れている外山に近づいていった。

「おいおい外山、負けちまったなー！！ はははは。コケてんじやねーよ、滑ったか？ ハデだなおい」

外山にそう言う岩佐だが、喋り掛けられた外山本人は一言も喋らず、面を外した顔も信じられないものを見たという顔で岩佐に立たされるが、何処か足元がおぼつかないようにフラフラとしていた。そんな状態である外山は、一度タマキの方へと振り向くが岩佐に無理矢理引つ張られながら出ていった。唯一、この状況が分かっている短髪の男性は不思議そうな顔をしている。

そんな中、キリノはタマキに近づいて懇願するような目で見つめた。

「タマちゃん。あの二人がまたいつかやって来るかもしれない…その時なんとかできるのはタマちゃん…あなただけなんです…！」

タマキはじつとその言葉を聞いていたが、その小さな口をゆつくりと開いた。

「……分かりました。どのくらいかは分かりませんが…取り敢えずよろしく願います」

ペコリと頭を軽く下げると、ワァーという歓喜の声がその場に響き渡った。短髪の男性だけは、何が起きているのか分からず頭の

周りに疑問符を大量生産中だった。しかし、その歓喜に包まれた空間を断ち切る声があがった。

「いやゝ、さすがタマキ。椿さんの娘やなゝ」

パンパンと拍手しながら立ち上がったリュウマは、ゆっくりとタマキに近づいていく。

「気迫というか、雰囲気がそっくりになってきてんなあ」

タマキは、母の名に反応してじっと近づいて来るリュウマを見据えている。キリノ達は、何がどういことか分からず黙って二人を見つめている。短髪の男性……まあ、もう紹介するのメンドイのでコジローは、更に知らない人介入のおかげで情報が処理仕切れないのか、頭から煙が上がっている。

「久しぶりやなあ、タマキ！」

歩むスピードを少し上げて、腕を広げて抱きしめる体勢で近づいて来るリュウマを見ていたタマキは一言だけ呟いた。

ああ、今、感動の再会……！！

「あの、貴方……誰ですか？」

ズコッー！！！！！！！！

タマキの一言でリュウマはそのままタマキを通り過ぎ、頭から気持ちいいぐらいのヘッドスライディングをかましていた。しかもそのまま滑っていったので頭を壁にぶつけて、僅かに擦れた所からプ

スプスと煙が上がっている。

「だ、大丈夫ですか？ リュウマさん」

その場からピクリとも動かないリュウマを見て、ユージが心配そうに囁いた。すると、リュウマはのっそりと立ち上がったと思ったら三角座りをして床にのの字を指でなぞり始めた。

「あゝ、何か期待損？ 確かに少しは覚えてくれてたら嬉しいなあとは思つとつたけど、ここまで忘れられとると……へこむわゝ。ハアゝ、覚えとつたん俺だけ………」

ブツブツと呟いているリュウマを見ているキリノ達は、掛ける言葉が見つからず困惑していた。そんな中、横から声が掛かった。

「なあキリノ、この状況……説明してくれないか？」

いつの間に回復したのか、コジローはキリノの横に来てこの状況を聞いてきた。

「いやあゝ、まあかくしかじかでして……」

「いやあ、キリノ先輩ギャグ漫画じゃないんだから……さすがにそれは……。」

苦笑いしながらキリノの発言にツツコミを入れるユージ。

「なるほど……ダンが外山にいびられてた所に丁度キリノと一緒にきたタマが居合わせて、そのことが気に入らなかったタマが今だけ仮入部するといつてそこで、次にどサドの外山がタマに目をつけたが

逆にボコボコにされたと。…で、あそこで床にのの字を書いてる赤い髪の兄ちゃんが、今日転校してきて編入手続きしにきた皇龍真君だと……なるほど、そういうことが」

「長！！ あの人言にそんなに集約されてたんですか？ って言うか通じるてるんですか！？ 先生」

コジローの言葉でツツコミの血が騒いだのか、一気にツツコミを入れるユージ。

当のコジローは、ユージのツツコミを無視して話を続けていた。

「で？ どうすんだ？ アレ」

コジローはリュウマを指差しながらキリノに聞いていた。見ると、何故かダンに慰めてもらっている。

するとリュウマは、すくつと立ち上がり何故か晴れやかな顔をしている。

「「立ち直った！？」」

ユージとコジローはこれまた綺麗にハモった。その横でキリノは「あははは」と笑っている。

そんな中、リュウマはタマキに再び近づいていった。

「まあ、落ち込んだってしゃあないな。俺とタマキが一緒におったん小さい頃やったし」

そう言いながら自分の赤い髪をボリボリと掻いた。

「あの……」

タマキがなにか言おうとしたが、それよりも早くリュウマが口を開いた。

「まっ、そういう所もタマキらしいんやけどな」

ニツ、とタマキに向けて微笑み、右手をポンとタマキの頭に乘せて優しく撫でた。そのリュウマの髪は窓から入り込む陽光を受け、美しく輝いている。

「あっ……」

リュウマのその行動を見たタマキは、今朝のあの懐かしい夢を思い出していた。自分が小さい頃、一緒に母から剣道を教えてもらっていた赤い髪の少年……。そしてそこではつきりとタマキは思い出した。夢の中の少年の顔も、その名前も……………。

そう、それは……………

「リュウマ…君？」 そう呟くタマキを見たリュウマは先程よりもにこやかな笑顔になりただ一言、力強く答えた。

「おう!!」

リュウマのその笑顔は、夕陽に照らされてかその場にいた皆が見とれる程に綺麗だった。

タマキもその笑顔を受け、頬を少し赤らめていた。ついでに言う  
とその影でキリノも再度、顔を赤らめていた。

今、西よりきた一陣の風が室江高剣道部に吹いた瞬間であった。



### 第3話：出会いと衝撃の再会（後書き）

「えー、どうも今回でやっとフルネームで出してもらった皇龍真ことリユウマです。何故冒頭から自分が出てるかっていうと、今回頑張り過ぎて隣で死んだる作者の代わりに進行させてもらってます。」

.....

「と言うわけで今回はタマキに来てもらってます」

「ど、どうも...川添珠姫です」

「いやあ、今回タマキは格好良かったなあ」

「いえ、そんな」

「特に最後の突き！あれはまさにブレイバーそのものやったなあ」

「そ、そうですね？」

「ああ、今思い出しても惚れてまいそうくらい格好良かったわ。

よし！そんなタマキには俺の愛の籠ったほお擦りをプレゼっくふお

.....ばた」

「だ、大丈夫でしょうか？」

.....コクッ.....

「なら言いですけど.....え？ これを読めば良いんですか？」

……コクッコクッ……

「分かりました、作者さんのご要望なら……ではいきます。今回のお話しはいかがだったでしょうか？ 評価、感想お待ちしております。次回も期待に応えられれば幸いです。それではまた次回でお会いしましょう。さようなら……ペコリ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3406d/>

---

バンブーブレード～西からの赤い風～

2010年10月14日16時35分発行